

宮古諸島初となるキバナハマヒルガオ、ヨルガオの開花と宮古島初となるアツバアサガオ、多良間島初となるオオバフジボグサの記録

砂川 栄喜

〒906-0007, 宮古テレビ株式会社, 沖縄県宮古島市平良字東仲宗根 968-9

はじめに

ヒルガオ科のキバナハマヒルガオ *Ipomoea violacea* L., ヨルガオ *Ipomoea alba* L. の開花はこれまで宮古諸島から報告されていない。また, 同じくヒルガオ科のアツバアサガオ *Ipomoea imperati* (Vahl) Griseb. は伊良部島 (佐藤・城間・阿部・横田, 2020) と多良間島 (初島・天野・宮城, 1975) で記録されていて宮古島からの報告はない。このほか, オオバフジボグサ *Uraria lagopodioides* (L.) Desv. ex Dc. は宮古島 (初島・中島, 1979) と下地島 (宮古島市総合博物館, 2013) からのみ記録されている。今回, 宮古諸島初記録となるキバナハマヒルガオの開花を宮古島で, 同じく宮古諸島初記録となるヨルガオの開花を下地島で確認した。また, アツバアサガオを宮古島で初記録したほか, オオバフジボグサを多良間島で初記録したので報告する。

調査

調査は, 2024年12月から2025年10月まで実施した。宮古諸島全域を定期的に巡回し, 分布や植生, 特定植物群落などの調査を実施した。特に種子の海流散布植物の調査に重点を置いた。種子の海流散布植物については, 宮古島の大浦東海岸, 真謝海岸, 福山東海岸, 白川田海岸, 長北海岸, 長間海岸, 浦底海岸, 新城海岸, 吉野海岸, 保良海岸, 保良マイバー海岸, 友利博愛漁港横の海岸, 下地の与那覇前浜, 伊良部島の白鳥海岸, 佐和田の浜, 下地島の西海岸, 多良間島の北海岸,

東海岸で実施。特にヒルガオ科の発芽, 生育状況を調査した。ヒルガオ科の子葉の同定については中西 (2017) を基本にした。

結果

キバナハマヒルガオ。

採集標本. MC M-N 2-25001, 宮古島吉野海岸, 2025年2月17日。

キバナハマヒルガオは日本国内では小笠原諸島の南島に自生する (山崎, 1987) 多年生草本である。種子を海流散布することが知られている広域分布種で, 九州の特に日本海側の海岸で漂着種子の発芽が記録されている (中西, 2013)。沖縄県内では八重山諸島の黒島で2014年に初めて記録されたあと, 内貴・和智・森脇・中西 (2025) が石垣島での開花個体, 西表島での約3mに伸びた個体, 宮古島での本葉が数枚出た個体の記録を報告している。

今回, 宮古諸島で初めてとなる開花個体を記録したのは城辺地区の吉野海岸だった。2024年12月21日に開花のほか果実を確認した (図A-1)。花は白色。花冠が直径80mmほどの長い漏斗状で雄しべと雌しべは花冠から突出していなかった。葉柄の上部に赤紫色の特徴的な腺体があった (図A-2)。この株は幹周り102mm (図A-3) で株元は木質化し, 陸側に4本の太い茎を伸ばしていた。海側にも数本の茎を伸ばしていたが全て枯れていた。最も長い茎の長さは13mほどだった。果実は縦28mm, 横29mmだった。種子は縦9mm, 横7mmで長毛が縦方向

に2列に分かれて生え(図A-4)全体が短毛で密に覆われていた(図A-5)。2025年2月まで開花が見られ,全ての果実が熟したのは3月下旬だった。1,2月の寒波で樹勢が著しく衰え陸側に伸びた太い茎は全て成長を停止した。その後,4月に株元付近から数本の茎を勢よく伸ばした。花径は発見時の12月下旬が最も大きく,翌年の春にかけて小さくなった。花サイズが小さくなったのは,寒波で樹勢が著しく衰えたためとみられる。周りにはグンバイヒルガオ *Ipomoea pes-caprae* (L.) Sweet, アダン *Pandanus odoratissimus* L. f., スナジタイゲキ (ハマタイゲキ) *Chamaesyce atoto* (G. Forst.) Croizat, クサトベラ (テリハクサトベラ) *Scaevola taccada* (Gaertn.) Roxb., モンパノキ (ハナムラサキノキ) *Messerschmidia argentea* (L. f.) I. M. Johnst., クロイワザサ *Thuarea involuta* (G. Forst.) R. Br., イボタクサギ (ガシヤンギ) *Cherodendrum inerme* (L.) Gaertn. などが生えていた。今回の記録が標本に基づく宮古諸島からの初記録となる。証拠標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている。

ヒルガオ科の海流散布された種子の発芽調査を2025年4~7月に実施した結果,キバナハマヒルガオを島の南東部を除く全ての海岸で確認した。発芽個体はグンバイヒルガオ,フウセンアサガオ *Operculina turpethum* (L.) Silva Manso の順に多く,キバナハマヒルガオはこれに続いた。中には1株ほどに成長した個体もあった。全ての発芽個体が大潮時の高潮線付近に生えており,人による踏みつけや7月下旬の大潮時に接近した台風による高潮でほぼ全て消失した。宮古諸島の砂浜のうち数か所は,飛躍的な人の立ち入り増加による踏みつけで半安定帯に生えるヒルガオ科を含めたほとんどの草本が壊滅的な状況にある。

キバナハマヒルガオの子葉の形はオオバハマ

アサガオ *Stictocardia tiliifolia* (Desr.) Hallier f.の子葉に似るが,葉身の基部がキバナハマヒルガオは浅い心形なのに対しオオバハマアサガオはより深い心形をしている。またキバナハマヒルガオは株全体が明るい緑色をしている傾向があるのに対しオオバハマアサガオは茎や葉柄が赤紫色を帯びる傾向がある。葉脈の入り方が違う。キバナハマヒルガオは本葉の葉柄の上部に特徴的な赤紫色の腺体が2個あるのに対しオオバハマアサガオは腺体がない。

ヨルガオ.

採集標本. MCM-N2-25002, 下地島, 2025年1月28日.

ヨルガオは熱帯アメリカ原産のヒルガオ科の植物で外来種である(国立環境研究所)。日本国内の多くの地域では1年生草本とされているが亜熱帯気候の宮古諸島(下地島)では多年生草本である。種子を海流散布することが知られている。花冠が直径100mmほどの長い漏斗状の白色大輪花を咲かせる。雄しべと雌しべは花冠から突出する。

2025年1月23日,佐和田の浜に面した下地島の道路沿いで開花個体を確認した(図B-1)。茎にトゲがあり(図B-2)周囲のギンゴウカン(ギンネム) *Leucaena leucocephala* (Lam.) de Wit を覆うように10m四方にわたって繁茂していた。1月26日の午後7時頃,夕暮れとともに一斉に開花する様子を確認した(図B-3)。

本種はユウガオの名称で園芸用として種子が市販されているが,今回確認した場所は海岸に隣接した雑木林で,種子の海流散布による自生の可能性が高いと考えられる。今回の記録が標本に基づく宮古諸島からの初記録となる。証拠標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている。

アツバアサガオ.

採集標本. MCM-N2-25003, 宮古島, 2025 年 10 月 18 日.

アツバアサガオは日本国内では九州南部から沖縄にかけて分布するヒルガオ科の多年生草本である(沖縄県文化環境部, 2018). 茎や葉は無毛. 茎は地表または地中を這い葉柄の付け根付近から根を出し勢力を拡大していく. 葉は厚みがあり幼苗の時は卵形, 成長に伴い 3 裂または 5 裂する. 花は花冠の直径が 40mm ほどの漏斗状をした白色で中心部が黄色. 雄しべと雌しべは花冠から突出しない. 宮古諸島では伊良部島と多良間島で記録されているが, 開発に伴う護岸の整備や台風時の高潮による消失などで安定的な自生地はない. 本葉が展開すると同定に混同するようなヒルガオ科の植物はない. 種子を海流散布することが知られている. 沖縄県のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている.

2025 年 4~7 月までの調査で, 4 カ所の海岸で合わせて 8 株の本種を確認した. 確認した株のほとんどが大潮時の高潮線付近に集中し, 成長段階は子葉に本葉が展開した芽生え(図 C-1) から茎を 30 ㎝ほど伸ばし分枝した株(図 C-2) までやや開きがあった. ほぼ全ての株が人による踏みつけや 7 月下旬の大潮時に接近した台風による高潮で消失した. 10 月 3 日に残った株の開花を確認した(図 C-3). 周りにはグンバイヒルガオ, ハマアズキ *Vigna marina* (Burm. f.) Merr., コマツヨイグサ *Oenothera laciniata* Hill, ソコベニヒルガオ *Ipomoea littoralis* Blume, スナヅル *Cassytha filiformis* L. var. *filiformis* などが生えていた. 宮古諸島の砂浜のうち数カ所は, 飛躍的な人の立ち入り増加による踏みつけで半安定帯に生えるヒルガオ科を含めたほとんどの草本が壊滅的な状況にある.

本種の子葉とグンバイヒルガオの子葉は発芽環境によって同定が紛らわしい個体があるが, アツバアサガオは葉身の基部が幅広く先端の切

れ込みが浅いことや葉脈の違い, 質感の違いで識別することが出来る. 今回の記録が標本に基づく宮古島からの初記録となる. 証拠標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている.

オオバフジボグサ.

採集標本. MCM-N2-25004, 多良間島, 2025 年 10 月 12 日.

オオバフジボグサは日本国内では宮古諸島と八重山諸島のみ分布するマメ科の多年生草本である(沖縄県文化環境部, 2018). 株全体が細かな毛で覆われる. 茎は地表を這いながら伸び, 途中から根を出して勢力を拡大する. 葉は 1~3 小葉で淡緑色の斑が不規則に入る. 10 月頃, 茎の先に淡い桃紅色の総状花序の花を咲かせる. 宮古諸島では宮古島と下地島で記録されている. 確認されている宮古島の自生地は私有地 1 カ所のみで人為的な影響を受けており, 絶滅の危険性が高い状況にある. 環境省のレッドリストで絶滅危惧 I B, 沖縄県のレッドデータブックで絶滅の危険性が最も高い絶滅危惧 I A に指定されている. 宮古島市の自然環境保全条例で保全種に指定されている.

2025 年 8 月 11 日, 多良間島内の 2 カ所で本種を確認した(図 D-1). 9 月 16 日に 2 カ所, 9 月 18 日に 1 カ所の計 5 カ所で本種を確認した. また 10 月 10 日には新たに 5 カ所で本種を確認し, 開花を確認した(図 D-2). 自生地は普段人が立ち入ることのない場所で, 所々に琉球石灰岩が裸出していた. 表土は浅くアダンが優占していた. 周りにはヒレザンショウ *Zanthoxylum beecheyanum* K. Koch var. *alatum* (Nakai) H. Hara やヒメクマヤナギ *Berchemia lineata* (L.) Silva Man) DC., ツルモウリンカ *Tylophora tanakae* Maxim. var. *tanakae*, ヤリテンツキ *Fimbristylis ovata* (Burm. f.) J. Kem などが生えていた. 今回の記録が標本に基づく多良間島からの初記録となる. 証拠標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている.

写真



図A-1 キバナハマヒルガオの花と葉, 果実



図A-2 葉柄上部の2つの腺体



図A-3 木質化した株元



図A-4 キバナハマヒルガオの種子



図A-5 短毛で密に覆われた種子の表面



図B-1 周りの樹木の樹冠など一面を覆う
ヨルガオ



図B-2 茎の至る所に見られたトゲ



図B-3 ヨルガオの花



図C-1 アツバアサガオの芽生え



図C-2 茎を伸ばし地表を這う様子



図C-3 アツバアサガオの花



図D-1 地表を這うオオバフジボグサ



図D-2 オオバフジボグサの花

謝辞

長崎大学名誉教授で亜熱帯植物研究所の中西弘樹氏にはキバナハマヒルガオの同定に関しお世話になったほか種子の海流散布植物についてご教示いただいた。小笠原村環境課自然環境係の米塚佐世子氏、小笠原陸域専門ガイド マルベリーの吉井信秋氏、公益財団法人都市緑化機構企画調整部の伊藤由華氏、小笠原野生生物研究会の藪内良昌氏にはキバナハマヒルガオの同定や現状把握に関してお世話になった。多良間村在住の村山武範氏、宮古テレビの亀濱翔太氏には多良間島調査の際にお世話になった。宮古島市総合博物館の湯屋秀捷氏には標本の収蔵に関してご協力いただいた。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 初島住彦 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正). 沖縄生物教育研究会.
- 初島住彦・天野鉄夫 1994. 増補訂正 琉球植物目録. 沖縄生物学会.
- 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一 1975. 宮古群島の植物. 沖縄県立自然公園候補地学術調査報告. 沖縄自然研究会 (編). 沖縄県,
- 初島住彦・中島邦雄 1979. 琉球の植物. 講談社
- 宮古島市史編さん委員会 2019. 宮古島市史第三卷自然編 第I部みやこの自然 本編. 宮古島市教育委員会.
- 佐藤宜子・城間恒宏・阿部篤志・横田昌嗣 2020 宮古諸島維管束植物目録. 宮古島市史編さん委員会. 宮古島市教育委員会.
- 宮古島市総合博物館 2013. 宮古島市総合博物館 収蔵資料目録 自然資料編. 宮古島市総合博物館
- 島袋敬一 1997. 琉球列島維管束植物集覧. 九州大学出版会.
- 沖縄県文化環境部自然保護課 2018. 改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (菌類編・植物編) レッドデータおきなわ. 沖縄県文化環境部自然保護課.
- 山崎敬 1987. キバナハマヒルガオ日本に野生す. 植物研究雑誌. 植物研究雑誌編集委員会.
- 中西弘樹 1999. 漂着学入門 黒潮のメッセージを読む. 平凡社.
- 中西弘樹 2017. 日本の海岸に漂着発芽するヒルガオ科植物の子葉の形態. 漂着物学会誌 第15巻. 漂着物学会.
- 中西弘樹 2013. 九州における熱帯産ヒルガオ科植物の海流散布. 生態環境研究 第20巻. 生態環境編集委員会編. 国際生態学センター.
- 内貴章世・和智仲是・森脇大樹・中西弘樹 2025. キバナハマヒルガオ (ヒルガオ科) を西表島, 石垣島, 宮古島に記録する. 植物地理 分類研究 第73巻. 植物地理 分類研究会編. 日本植物分類学会.
- 琉球の植物研究グループ 2018. 「琉球の植物」データベース. 国立科学博物館.
- 生物調整領域 生体リスク評価・対策研究室. 侵入生物データベース. 国立環境研究所.

